

REPORT

独立行政法人 国際協力機構（ジャイカ）

四国センター JICA徳島デスク

森陽子

徳島県上勝の地域創生、そして、 環境へと配慮した取り組みのご紹介

JICAは、約半世紀の間、途上国の様々な課題の解決に取組み成果を上げてきました。今後も「人間の安全保障」の理念に基づき、これまで培った知見・経験、国内外のネットワークを生かし、SDGsに貢献します。

発展途上国において、ごみ処理については大変重要な問題のひとつです。さまざまな観点から、ごみ処理問題への取組みを行っている団体が徳島県上勝町にあります。海外から来日したJICA研修員も視察させてもらっています。身近なごみについて考えるきっかけにしてください。

四国一ちいさな上勝町から広がるゼロ・ウェイスト

上勝町ゼロ・ウェイストセンター
Chief Environmental Officer大塚桃奈

『上勝町ゼロ・ウェイストセンター』

徳島県上勝町は、2003年に日本の自治体ではじめて「ゼロ・ウェイスト（豊かな自然を守るため町で出るごみの焼却・埋め立てをゼロに近づけること）」を宣言したことをきっかけに、住民一人一人が消費活動の過程で生まれるごみとこつこつ向きあい、45分別の取組みを通じてリサイクル率80%を達成している。2021年5月30日（ごみゼロの日）、町ではさらなる試みとして、消費者と生産者／住民と来訪者が交流し学びあう中で循環型社会のヒントを探るプラットフォームを目指し、複合公共施設である「上勝町ゼロ・ウェイストセンター“WHY”」がオープンした。上空から見ると疑問符の形をしたこの施設は、従来、町に唯一存在していた廃棄物回収場である「ゴミステーション」と無料のリユースショップの「くるくるショップ」



に加え、イベントやセミナーが行える「交流ホール」、リモートワークが可能なオフィススペース「ラボラトリー」、上勝の暮らしを体験できる「HOTEL WHY」を兼ね備えている。施設を形づくる建材は、主に上勝町を中心に集められ、ネガティブな印象を持ちやすいごみに対して愛着やワクワクし

た思いを感じられるようなデザインを心がけた。「ゼロウェイストアクション」をコンセプトにしたホテルには、昨年1年間で県内外から1200名ほどの宿泊客が訪れ、消費者行政担当大臣を含む5000名ほどの視察者が上勝の取組みに触れるためにやってきている。

森陽子

徳島県上勝の地域創生、そして、 環境へと配慮した取り組みのご紹介

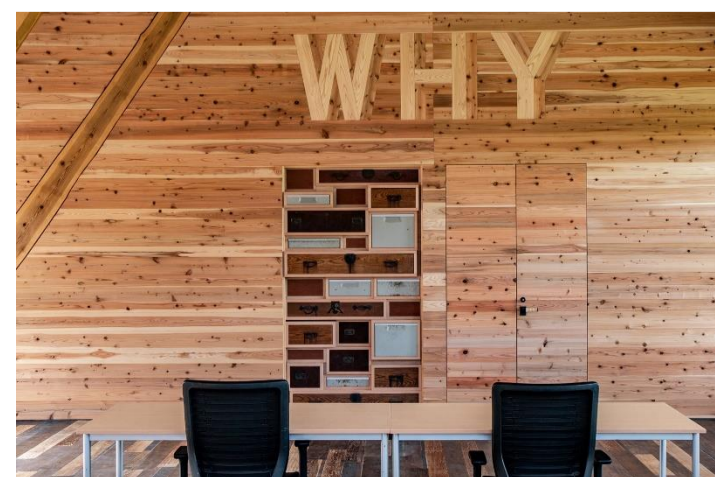
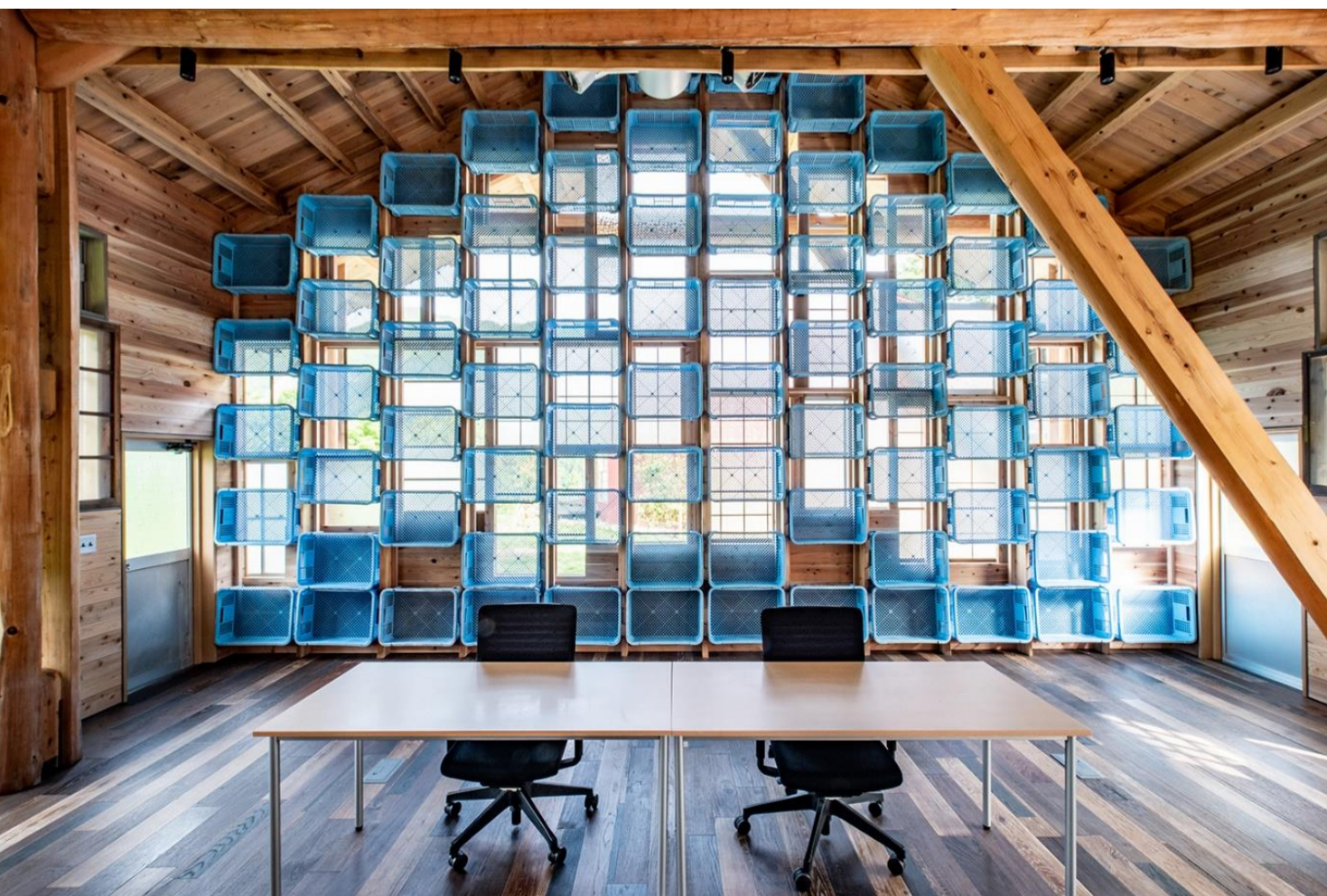
『消費を見つめ直す』

あらゆる「消費」を前提に社会が動いている上で、お金があれば簡単にモノやサービスへ生活を委ねることができる。さらに、それぞれのつながりが不透明であればあるほど、なんの後ろめたさもなくモノとの関係性は容易に断つことができてしまう。毎日の暮らしはモノを買い、作り、使い、ごみ箱に捨てるという行為から成り立っている。そして家庭から出るごみは、一般的に週に何度か決まった収集日にごみ袋に入れると、誰かがどこかへ持って行ってくれるのである。日本では衣服の廃棄量が年間約48万トンあり、食品ロスは年間646万トン、廃棄プラスチックは年間850万トンに上る。「ゼロ・ウェイスト」という視点から改めてモノ、そしてそれを取り巻く生産者や地域社会、自然環



境に思いを馳せることは、生産だけでなく廃棄過程にも透明性をもたらし、価値を失うそれぞれのごみを資源として生まれ変わらせる希望を見つけることができるのではないか。意識した者だけが一生懸命にごみの減量化や資源化に取り組むのではなく、気軽にごみが捨てられる社会の中にごみにしない選択肢をつくっていくことが必要だと感じる。

上勝の分別の種類には、「どうしても燃やさなければならないごみ」そして「どうしても埋めなければならないごみ」と呼ばれるカテゴリーがあり、焼却・埋立以外に再生できないモノがこれらに分類される。特に再生できない複数の素材から成り立つ製品はその代表的な例として挙げられる。つまり、生産者は循環を意識してモノを製造し販売する流れを組み立てていくこと、行政はその取り組みを促進するために制度設計を整えること、消費者はそれを理解してモノを選択することが求められている。



森陽子

徳島県上勝の地域創生、そして、 環境へと配慮した取り組みのご紹介

『ゼロ・ウェイストの可能性』

上勝町で18年に渡り取り組まれてきた「ゼロ・ウェイスト」だが、ポジティブな思いの積み重ねがこの活動の持続性の鍵だと考える。例えば、当施設の「くるくるショップ」と呼ばれる場所では、なるべくごみを出さない「リデュース」という考えから、町の住民はまだ使用ができる製品（例えば陶器、衣服、家具）などを持ち込み、持ち帰りは誰でも自由に行うことができる。現在では、県内外から人々が立ち寄り、まちで不要だと思われていたモノが必要だと思う人へとバトンタッチされている。町の住民もごみの分別にあわせて立ち寄りモノとのセレンディピティを楽しんでいる。「ゼロ・ウェイスト」を地域の中に人々が集う機会とすることで、町の活性化にも貢献する可能性を秘めている。

今年の5月には「くるくるショップ」の新しい試みとして、岡山の企業が立ち上げた「FUKKOKU」というプロジェクトにオフィシャルパートナーとして参加した。これは使用済みデニム製品を町内外の人々から集め再びデニム生地仕立てることで、人々を巻き込みながら、捨てられるはずだったモノに価値をつくるプロジェクトである。今年5月から6月末まで2か月の回収期間を設け、「サイズが変わって履けなくなった」「好みが変わった」などの理由からクローゼットに眠っていたデニム製品を持ち寄っていただいたところ、山間部に位置する人口約1,500人の上勝町に166本のデニム製品が持ち込まれた。そのうちおよそ2/3は町外からの持ち込みで、デニムを手放した先の透明性や「ゼロ・ウェイスト」の取り組みに共感して遥々上勝へ



やってきてくれたのである。これらのデニムは今後、付属品を解体した後、倉敷紡績の工場へ運ばれ、デニム生地となる。

様々な視点からウェイトを考えると、その立地からカーボンフットプリントが大きくなってしまい、改善の余白はあるといえる。しかし、上勝町では過疎化が著しく進み、上勝だけでは循環のサイクルをつくれぬモノも数多くある。小さなステップではあるがコラボレーションを通して「問題の一部になるのではなく、解決の一部になれる」機会を、ゼロ・ウェイストセンターとともにつくることを目指したい。なぜモノをつくるのか？なぜ買うのか？なぜ捨てるのか？日々何気なく捨てているひとつのごみから、暮らしの中のウェルビーイングを探す旅は始まったばかりである。

